（仮称）幸田町郷土博物館基本構想

概要版

第１章 事業の背景と目的

1-1. 事業の背景

幸田町の歴史・文化は幸田町の将来像の実現において重視すべき要素であり、より望ましい展開に向けて、歴史・文化の様々な取り組みの拠点として町立博物館を具体的に検討します。

現在の幸田町郷土資料館は、施設の老朽化、狭隘化、資料の十分な保存環境並びに望ましい展示環境の確保が難しいなどの課題があり、新しい町立博物館「（仮称）幸田町郷土博物館（＝新博物館）」のあり方を検討します。

上位計画における新博物館の位置づけ

第６次幸田町総合計画

基本計画（まちのあるべき姿）

・幸田の歴史、文化を大切にしている

主要な取り組み

・歴史の伝承、文化財の保護・活用
・文化にふれる機会の充実、文化施設の充実

第２期幸田町まち･ひと･しごと創生総合戦略

戦略の方向性

・地域の歴史や文化を生かす

具体的な施策

・文化財の総合的な保存と活用
・郷土教育の拠点施設である町立博物館の建設

幸田町郷土資料館の現状

基本情報

・所在地
深溝清水36-1
・開館年
1977年
・延床面積
約264㎡
・入館料
無料

利用者目線での課題（アンケートより）

利便性・快適性	開館から46年経過し老朽化／バリアフリー対応が不足／トイレが男女共用／スリッパへの履き替えが必要　等
展示・教育普及	機能的な不足・不備のため他館から資料を借りにくい／スペース不足、資料説明やワークショップができない 等
資料の保存環境	温湿度や照明の管理が適切にできない／スペース不足のため、町の歴史資料の散逸・消失リスクが高い　等

1-2. 新博物館建設事業の目的

幸田町は西三河・東三河の結節点であり、多様な歴史や文化を有します。長崎県島原市や京都府福知山市などと歴史的な縁が深く、また村落の統合や編入、菱池の干拓など、伝えるべき魅力的なストーリーを多く有しています。

しかし、現在の資料館には課題が多く、地域の魅力や活力を伝える拠点が必要です。そこで、幸田町郷土資料館の資料収集や展示、教育普及活動、地域に根差した調査研究をベースに、幸田町の将来像実現に寄与する施設の整備を推進します。

歴史・文化の力で、地域のより深い魅力を顕在化し、
幸田町のまちづくりを強く支える拠点を創出する

1-3. 施設の建設予定地

基本構想では、ハッピネス・ヒル・幸田を建設予定地として想定しています。ハッピネス・ヒル・幸田は、町民会館、図書館などの文化施設が設置される幸田町の文化の中心地です。また図書館等との「知の連携」により、より充実した事業活動の展開が期待できます。

第２章 理念と方針

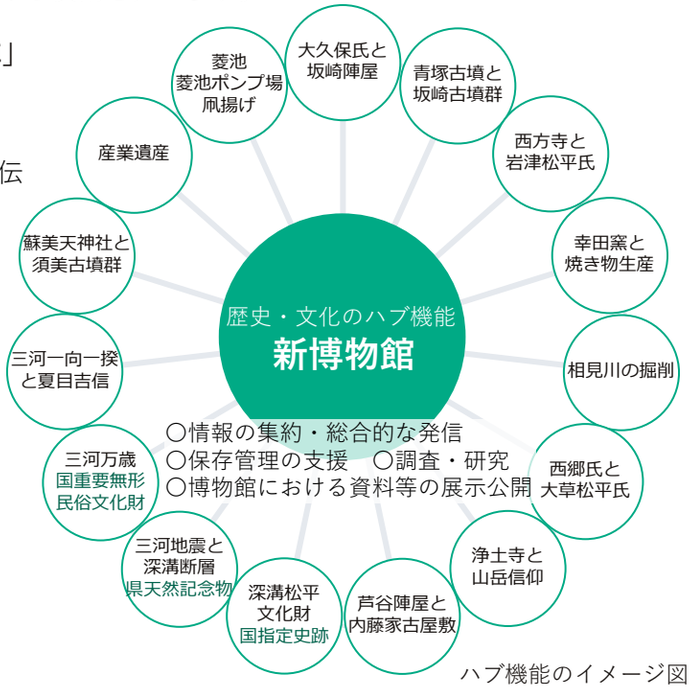
2-1. 新博物館に期待される役割

絶えず動き続け、様々な視点から風景を眺めることができる観覧車のように、新博物館は着実に活動を展開し、幸田町の歴史や文化などを理解する多様な視点を提供し、なおかつ幸田町における様々な歴史的資産や事象を観覧車のように結びつける役割を担います。

● 幸田町の歴史・文化に関する「知の観覧車」
- 点在する文化施設のハブ機能（歴史・文化の中央センター）
- 幸田町の歴史・文化の魅力をわかりやすく伝え、情報と人をつなぐ場
- ハッピネス・ヒル・幸田の新たな魅力を拡大する場

● 郷土・幸田町への誇りを醸成する場
- 未来を育む社会教育施設
- 時代に応じて柔軟に成長し、まちづくり・ひとづくりに寄与する場

● 「出会い」「学び」が幸せにつながる場
- 本物との出会いと学びが、豊かな生き方、幸せにつながる場



ハブ機能のイメージ図

2-2. 新博物館の基本理念

現在をひも解き、未来を考えるために、歴史を学ぶことは非常に重要です。しかしながら、幸田町には今後の調査・研究が待たれるものも多くあります。そこで、町民及び施設に関わる人々と「ともに探求」する、「ディスカバリー・ミュージアム」として未来を発見していきます。

探求や発見は自分が当事者となる、ワクワクする活動です。楽しみながら、見つけたものをみんなで共有し、みんなが幸せになる未来を創出することを基本理念とします。

幸田の歴史と今を再発見し、
みんなが幸せになる未来を探求する

2-3. 利用者層

新博物館は、幸田町の町民および町を訪れる人々、町を詳しく知りたい人々に対して、幸田町の歴史や文化、その魅力を伝える施設とします。

その中でも特に、次世代を担う子どもたちを重視します。そのため、学校団体や家族連れが楽しみながら関心を深め、より深い理解につなげていくことができるような事業活動を展開します。また、団体や家族連れが利用しやすい施設のあり方にも配慮しながら施設の内容を検討することとします。

■重視する利用者

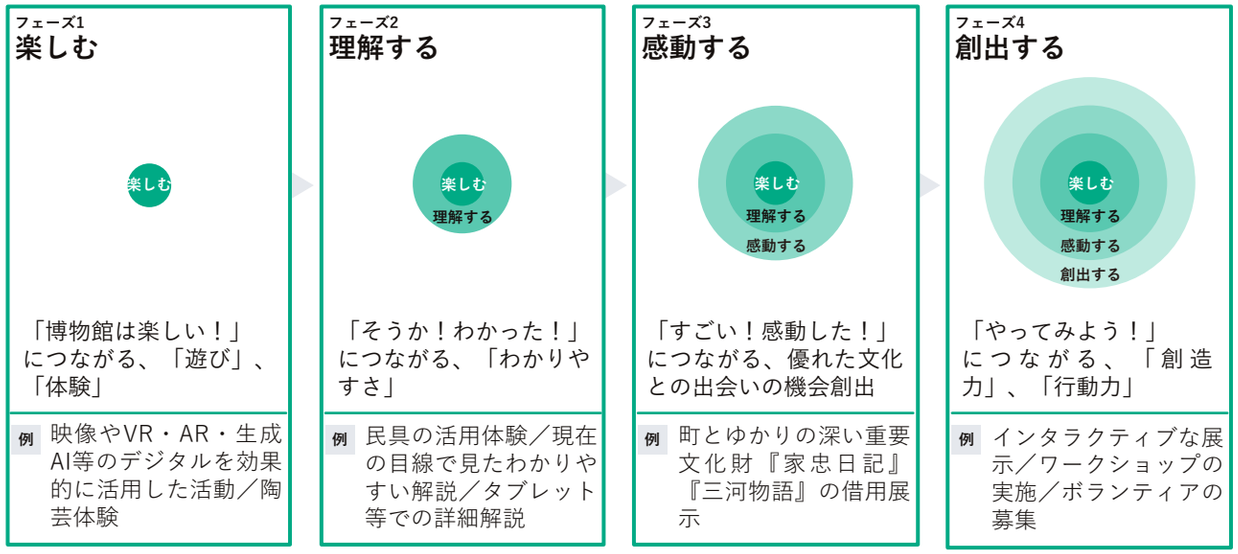
・幸田町の町民　・幸田町の子どもたち（学校団体、家族連れ）
・新たに幸田町に住まう人々　・幸田町を訪れる人々　等

2-4. 事業活動における基本方針

「基本理念を具体的にどのように実現していくのか」について、下記を基本方針として重視し、博物館づくりと運営のあり方を検討していきます。

● 理念の実現に向けた、利用者視点の四つのフェーズの重視

- 「好きだから行きたい」「機会があれば」「特に関心がない」など、博物館に対する関心度は様々考えられます。新博物館は、町民や来訪者など、多くの方が来館・利用し、リピーターとして何度でも行きたいと思ってもらえるよう、利用者視点の四つのフェーズを重視します。



● 「成長する博物館」としての「柔軟性」、「拡張性」の重視

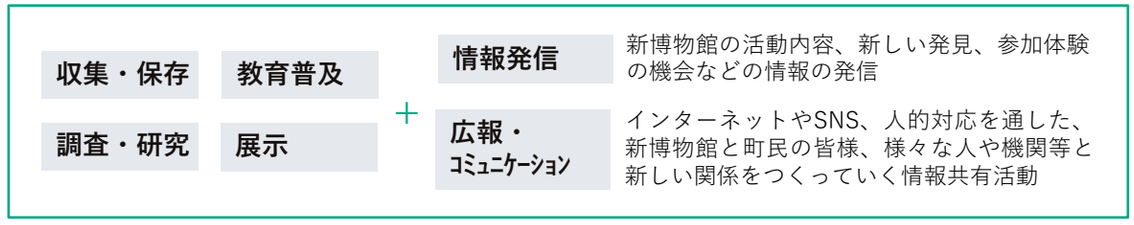
- 収蔵庫・デジタルアーカイブを戦略的に検討し新博物館を拡張性のある「成長する博物館」とします。
- 将来においても収集・保存機能を確保するため、厳密な保存環境が必要な資料は館内の収蔵庫に、ほかは外部倉庫に保管するなどの柔軟な施設運用を検討します。
- 重要性が増しているデジタルアーカイブを積極的に検討し、デジタルを活用した体験提供や資料の教育・観光活用などを図ります。

● 柔軟な発想と活動の展開を支える「連携」の重視

- 町民会館や図書館と連携し、ハッピネス・ヒル・幸田の新たな魅力の拡大につなげます。
- 博物館自体の規模を抑えつつ収蔵庫や展示室などを充実させるため、町民会館や図書館と機能を連携します。
- 子どもたちの郷土への理解と愛着、誇りを醸成するため、学校教育と連携します。

第３章　事業活動構想

博物館における事業活動は、博物館法で規定のある、「収集・保存」「調査・研究」「教育普及」「展示」が基盤となる活動とされています。新博物館では、近年博物館に求められる多様なあり方をふまえ、「新しく生み出されるこれからの博物館」の活動として、「情報発信」「広報・コミュニケーション」といった利用者サービスを位置づけ、多くの町民や来訪者などに広く親しまれ愛される博物館をめざします。



第４章 展示構想

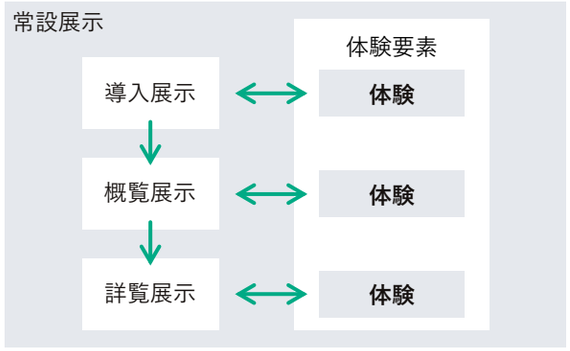
新博物館では、基本理念の実現に向け、子どもから大人、外国人まで、あらゆる人々が楽しみながら、理解を深めていくことができる展示を行います。展示の考え方については、利用者視点の四つのフェーズを重視しながら、常設展示、企画展示などを展開していきます。

常設展示のテーマは、自然関連の「地」、歴史関連の「時」、それらの中で幸田町域に生きてきた人々が紡いできた「絆」です。一つひとつの資料が秘める情報（物語）をひもとき、歴史の理解から、ともに未来を考え、探求する機会の創出につなげて、わかりやすく伝えることを重視します。

■常設展示のコンセプト

幸田の地と時と絆の物語を探り、伝える

常設展示は、導入、概覧、詳覧の展示を組み合わせ、また触れたり遊んだりできる体験的な要素を取り入れます。



導入展示　展示内容に関心を持ってもらうため導入として行う好奇心を刺激する体験重視の展示

概覧展示　菱池を中心に、町の歴史や豊かさを映像などでダイナミックにわかりやすく紹介する展示

詳覧展示　様々な資料（本物）との出会いとわかりやすい解説を通して、来館者それぞれの深い理解や新しい発見、関心につなげる展示

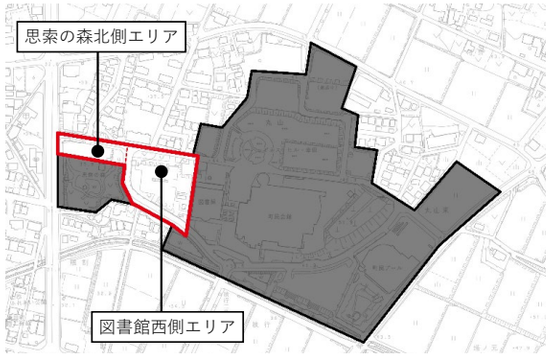
第５章 管理運営構想

新博物館は、学芸系の事業活動はもとより、来館者や利用者への充実したサービスの提供を持続的・発展的に行います。そのため、整備及び管理運営方式としては、博物館の建設や資料の収集・保存、調査・研究、展示、教育普及の業務は幸田町の直接運営を検討するとともに、より効果的な情報の発信や事務、施設管理などは、優れた技術や知見を持つ民間の力の導入を重視します。

第６章 施設構想

建設予定地として想定している「ハッピネス・ヒル・幸田」について、施設の基本的な考え方として、「新博物館の基盤となる機能の充実、強化」、「すべての人にひらかれた新しい博物館」「ハッピネス・ヒル・幸田との一体性、周辺環境への配慮」といった内容で検討を進めます。

■新博物館の設置検討エリア



利用状況や地盤、自然災害リスクなどの敷地要件を確認した結果、新博物館の設置に適していると考えられる状況です。安全性などを勘案すると「思索の森北側エリア」「図書館西側エリア」へ設置を検討します。

敷地や動線など、新博物館整備に求められる重視事項をもとに新博物館の設置検討エリア内における施設配置について検討した結果、「図書館西側エリア」内での配置が適切と考えられますが、配置計画の最終的な決定にあたっては事業活動の内容や敷地全体での調整が必要となるため、基本計画においてさらに検討を行い、詳細を決定します。

第７章 今後の進め方

本構想の内容をもとに基本計画の策定と計画地の検討を進め、計画地が決定した後、建築及び展示設計を行い、その後敷地造成工事、建築工事、展示工事を順次推進します。